

世界的書家手島右卿賞 仲川教授が「第1回受賞」



表彰される仲川教授=右。左は手島泰六・
顕彰会副会長(高知新聞社提供)

格調高く造形美を表現

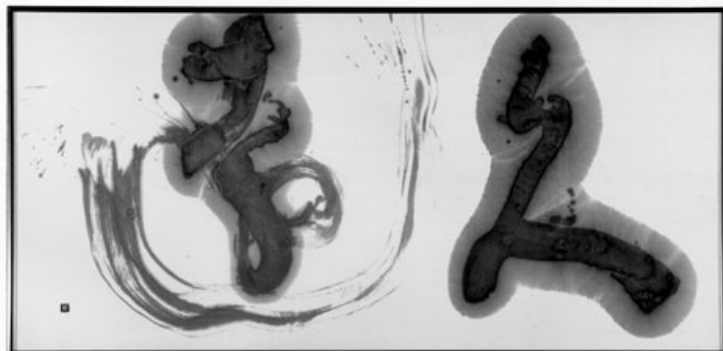
優れた書家を表彰する第1回手島右卿(てしま ゆうけい)賞(手島右卿顕彰会、高知新聞社主催、共同通信社共催)の授賞式が3月27日、高知市で開かれ、本学の仲川恭司・文学部教授が受賞した。同賞は、現代の書に大きな影響を与え、世界的にも評価の高い高知県安芸市出身の書家、手島右卿(1901~1987 元本学教授)の業績を顕彰し、創造性豊かな書家とその作品をたたえるために創設された。選考会では、満場一致で仲川教授の作品「久遠」が選ばれた。

表彰式当日は右卿氏の命日に当たり、授賞式で武田厚選考委員(美術評論家)は「手島右卿のように意欲的で革新的な書家を選んだ」と選考理由を発表。仲川教授の作品については「格調高く、そのかたちを反映した造形的美しさが見事に調和されている」と高く評価した。

仲川教授は「尊敬する右卿先生の賞をいただき、書家としての生き方を認められた思いです。これから、信念を持って自らの書にまい進していきたい」と謝辞を述べた。

高知市内で受賞記念書展も開催され、受賞作のほか「空蟬」「絶叫」など代表作21点が展示され、多くの観客を呼んだ。

出身である新潟県佐渡の高校時代、「右卿先生の臨書に触れ、魂を揺さぶられた」という仲川教授は、大学入学後、右卿氏に弟子入り。「少字数書」を世界的芸術にまで昇華させた恩師の流れを汲み、右卿創設の独立書展や毎日書道展などを主要な作品発表の場として力作を次々と発表。海外の展覧会や巡回



展出品にも意欲的で、国際的 受賞作の「久遠」に活躍している。一方で恩師も務めた専修大学文学部教授として、書の魅力を伝える教育にも情熱を注いでいる。

《校友短信》

ライフセービング全豪選手権 本多さん3位に

ライフセービング愛好会OBでライフセーバーの本多辰也さん(平12商、東京消防庁)が、3月29日から4月2日まで、豪・ゴールドコーストで開催された2006ライフセービング全豪選手権に出場し、ビーチフラッグスで3位に入賞した。

《校友新社長紹介》

(株)ソディックハイテック

綿貫雄一氏 (わたぬき・ゆういち=昭42商)

4月1日就任。同社は放電加工機関連機器や工作機械の開発・製造・販売など、多角経営を展開している。

《専大校友をたずねて》

2度の韓国留学で日本を“知った”

—外務省アジア大洋州局 北東アジア課で「ロジ」担当 小原大介さん(平14院文修)

外務省のロジスティックス担当として、要人が外交活動に専念するために欠かせない後方支援業務を担当。04年の小泉首相再訪朝の時も、先遣隊の一員として平壤に渡った。

「2度の留学で韓国語を習得し、日本を見つめた体験が今の仕事の“根っこ”になっています」。

神奈川県逗子高時代、社会科の先生に連れられ、横須賀の軍事施設を訪問した。壁には戦前、朝鮮半島から来日した人々によって殴り書きされたハングル文字。「これはなんだ?」。韓国・朝鮮語を学ぼうとしたきっかけだ。

拓殖大政経学部に入學後、96年、休学してソウルの延世大学語学堂に留学。ハングルを学ぶ日本人が激増している昨今だが、10年前は珍しい存在だった。

「韓国の近・現代史」を専門と定め、韓国の檀国大学と交換留学制度が確立されている本学の大学院文学研究科(矢澤康祐指導教授=現名誉教授)に入學。2000年、再びソウルへ。檀国大学大学院に長期留学した。

「前回の語学留学で、言葉には自信を持っていました」。ところが、いざ授業に出ると教授が発する専門用語がさっぱり聞き取れず、黒板に書かれたハングルのくずし文字は読解不能。「完全に打ちのめされました」。講義内容を録音、板書文字そのままをノートに書き写して夜遅くまで机に向かった日々は「最も勉学に励んだ時代」だった。

留学は自国を見直す機会にも。日本には海外に誇る伝統文化や古典が多くあるにもかかわらず、それらに触れてこなかった。「他国を知るには、まず日本を深く知ることと、痛感しました」。

韓国語の教員を目指したが、ソウルの日本大使館での庶務の仕事を得て外務省入省の足がかりに。夫人李俊映さんとは檀国大学時代に出会った。

いま「ロジ」の仕事は天職と思えるほど充実している。「学生時代に果敢に踏み出したからこそ道が開けました」。

《専修人の新しい本》

米国政治のダイナミクス(上)
藤本一美 著

本書は、第二次大戦以降の米国政治史を概観したものである。対象としているのは、1945年から1974年までの戦後米国史であり、政権でいえば、ルーズベルト、トルーマン、アイゼンハワー、ケネディ、ジョンソン、ニクソンおよびフォードの各政権である。



この時期の米国政治は、米ソ冷戦に規定されていた。戦前から1952年までは、リベラルな民主党が政権を握っていたものの、1953年から1960年までは保守的な共和党の時代が8年続いた。1961年から1968年までは民主党が政権に返り咲いたが、1969年から1975年まで再び共和党が政権の座についた。米国の二大政党制の変遷とダイナニズムが見てとれる。(大空社・2400円+税)

著者(ふじもと・かずみ) = 法学部教授。担当は政治学原論ほか。

戦後米国大統領の「一般教書」(第2巻)
藤本一美 著

本書は、ケネディ、ジョンソン、ニクソンおよびフォード各歴代大統領の年頭の一般教書を解説を付した上で翻訳したものである。



大統領が年頭に読み上げる一般教書は日本の場合でいえば、通常国会における総理大臣の施政方針演説にあたるものである。一般教書では、米国の内政、外交全般にわたって基本方針が明らかにされている点で極めて重要なものである。

厳格な三権分立制を採用している米国では、大統領は法案を連邦議会に提出できない。そこで、大統領は連邦議会に送付して読み上げる一般教書を通じて、自分が意図した法案の実現を求めるのである。年頭の一般教書は、米国政治の現状と方向を知り得る貴重な資料である。(大空社・15000円+税)

庭の文化史<全6巻>
島田孝右 監修

テンブル、チェンバース、レプトンなどの代表的な著作を含む非常に貴重で、面白く読める庭園論を集めたものである。18世紀のイギリスは、東洋の磁器にあこがれ、茶に薬効を求め、庭づくりに生きがいをみいだした時代であった。



崇高な美からピクチャレスな美、そしてランドスケープ的な美へのあこがれが、「庭」に表象化されているとも言える。また、イギリス人は、特に、中国の非幾何学的な庭に関心をよせた。

この資料集は、イギリス思想史、文学、美学の研究者に、大いに役立つと考える。(ユーリカ・プレス・13万8000円+税)

監修者(しまだ・たかう) = 商学部教授。担当は英語。
編集・松平圭一(まつだいら・けいいち) = 東京電機大学教授。